＝ふるさとの話題＝
郷土の先史

私達の住んでいるこの横芝町は台地と低地の二つに分れていることは皆さんのよく御存知のことと思います。

この台地は常総台地（両総台地ともいう）と呼ばれ、地質時代の第四紀の洪積世に形成されたものであり、低地は所謂九十九里海岸平野の一部であって、比較的新しい沖積世の時代に隆起と堆積とによって形づくられたものである。従って地質の上からは前者を洪積層〃後者を沖積層とよんでいる。

さて私共の町にはいつの頃から人が棲むようになったのであろうか、又其の時代の人はどんな生活をして居たかということを、出土品によって推定することは興味あることであると思う。

私達は横芝町図（二万五千分の一）をひらいて見ましょう。そしてまず10mの等高線で色鉛筆でたどって見ると、沖積地の旧横芝、上堺にはたとる所がない。大総地区は現在の地形と大体似ているが、更に30m註(1)の線をたどると一層変化した地形が見られる。即ち数多の入江、岬、湾島、砂浜等が入り乱れていることに気付かれる。この静かな入江や湾、或は島の周囲などは貝類（蛤、しじみ、あさり、だんべいきさご等）や魚類（たい、くろだい、すずき等）などの食糧源を又背後の山林は、猪、鹿、猿、狸等の食糧源の供給場所であって貝類が常食とされていたように思はれる。

是等の食糧は生食したか、焼いて食べたものか、それは不明であるが、爐を造って火を燃やしたことは、確実である。これはたこ焼の土器を使用した。その形も現在の瓶のようなものもあり、足のついたもの、口の広いもの、狭いものなど、其の形は一定していなかった。是等の土器は何処で焼いたかは、今後の研究の問題である。当時は農耕というよりも漁撈を中心とした生活であって、それも現在のような、外洋性のものでなく、入江や湾を主とした、内湾的性格のものであったと言える。これの種類から推定される。

そのように推定される。

限られた紙面なので、学問的に、細かに述べることが出来ませんでしたが、折を見て書いて見たいと思います。

註(1)　地上にある見出化石層は25m位の成田層、その上に2～10m位の東京層が堆積されて堆積前の関東ローム層がはいて、住居はこれらの上に